

2022.4
(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とよ や 富 薬

4号

第44巻
No.393



レンギョウ *Forsythia suspensa* Vahl (モクセイ科 *Oleaceae*)

生薬 レンギョウ（連翹） 熟した果実を採取し陽乾した後、種子と夾雑部を取り除く。

成分 リグナン類: arctiin, arctigenin, phillygenin, phillyrin, matairesinol, pinosresinol, pinosresinolglycoside、フェネチルアルコール配糖体: forsythoside B、フラボノイド: rutin、トリテルペノイド: oleanolic acid, betulinic acid, ursolic acid、イリドイド配糖体: forsythid, forsythid methylester 等。

効能 腫れ物、にきび、吹き出物、疥癬、瘰癧、腫瘍、丹毒等に用いる。駆風解毒湯、荊芥連翹湯、防風通聖散等の漢方処方に配合される。

生薬 レンギョウ（連翹）

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇



第16改正日本薬局方では連翹の基原植物をレンギョウとシナレンギョウ (*F. viridissima*) の二種を規定していましたが、第17改正日本薬局方からはレンギョウ一種のみとなりました。レンギョウは中国中東部原産で庭や生垣に植栽される高さ2-4mになる落葉半つる性の小低木です。枝は淡黄褐色で皮目があり、随は中空です。枝先は垂れて地面につくと容易に根を出し活着して繁殖します。挿し木による繁殖も容易です。葉は対生、1-2cmの葉柄があり、葉身は卵形、長さ4-8cm、巾3-5cmの大きさで、鋸歯があります。花は3-4月頃葉に先立って腋芽に単生し、花冠は4深裂し、裂片の形は倒卵状楕円形で巾7-10mm、色は黄色です。雄蕊2、雌蕊

1が花筒内にあります。果実は蒴果で長方形、長さ約1.5cmで粒状の皮目があります。種子には狭い翼があつて鋭く尖り堅く、長さ7mm程度です。もう一種のシナレンギョウは中国東部原産で国内でも多く植栽されています。よく似ているため間違われることが度々ありますが、枝が直立すること、随ははしご状に段状になり、開花と葉の展開は同時であること、葉は6-10cmの楕円形から披針形であることなどから見分けることができます。他の類似植物には朝鮮半島原産のチョウセンレンギョウ (*F. koreana*) や本州中国地方に自生するヤマトレンギョウ (*F. japonica*)、小豆島原産のショウドシマレンギョウ (*F. togashii*) があります。

レンギョウやシナレンギョウは園芸用として広く栽培されていますが、果実を見かけることは滅多にありません。原因は花の雌蕊と雄蕊にあると言われています。雌蕊が5-7mmと長く、2本の雄蕊が3-5mmと短い長柱花を持つ株と、雌蕊が3mmと短く、雄蕊が6-7mmと長く葯も大きい短柱花の株の二つの形があり、同型どうしでは受精することはなく結実しません。これを異形蕊不和合性植物と言ひ、ソバ (*Fagopyrum esculentum*) やサクラソウ (*Primula sieboldii*) などで見ることができますが、これらは主に種子繁殖する植物であるため両花が混ざっている状態が作れ、問題はありません。レンギョウの場合、挿し木などによる栄養繁殖が簡単なため、どの株も親株が同じで同一型に片寄ってしまい、交配することがなく果実を見ることはできないのではと考えられています。薬用の果実を生産するには、長花柱型と短花柱型の両方を混ぜて植栽する必要があります。

日本に渡来したのは天和年間(1681-1683)のことで、観賞用として植栽されたようです。園芸書『花譜』(1698)に「連翹 二月に、黄花をひらく。花ちりて後葉生ず。其莖細長くして、かづらのごとく、一本よりくき多く生ず。くきよわくして、独り立ことあたわず。樹にすがりてたてり。又竹木をたててゆい付てよし。秋実をむすぶ。葉に用ゆる連翹これなり。又一種、くきにつよきあり。是は物にすがらずして、ひとりたてり」と半つる性のレンギョウと直立するシナレンギョウが記されていることから、両種ともほぼ同時期に渡来していたと思われる。果実を薬として用いることも記されています。薬用として栽培された記録は「小石川御薬園」の「芥川預御薬園の分」として享保七年(1722)に「(吹上より)連翹三包」とあり、種子を入手したこと、享保九年(1724)に「(吹上より村松彦四郎相渡す)連翹之枝きだち一四束」と挿し木用にしたのか枝を入手しています。『本草綱目啓蒙』(1803)には「木本と藤本と二品あり。……藤本の者は実を結ぶこと稀なり。木本の者は実を結ぶこと多し。故に薬園には必ず木本の者を栽ゆ」とあるは先に述べた異形蕊不和合性植物の性質のため、同一株からの栄養繁殖では交配することがなく、長花柱型同士、短花柱型同士でも結実しにくいと考えると考えられます。(村上守一 記)